

## 対称行列の直交行列による対角化

この節では、対称行列が直交行列により対角化可能であることを学ぶ。

**定義 1** (対称行列).  $n$  次正方行列  $A$  が  ${}^tA = A$  を満たすとき、 $A$  を対称行列という。また  $A$  のすべての成分が実数であるような対称行列を、特に実対称行列とよぶ。

対称行列の固有ベクトルは次の性質をもつ。

**定理 2.**  $\lambda_1, \lambda_2$  を対称行列  $A$  の相異なる固有値とし、 $\mathbf{u}_i$  を  $\lambda_i$  に関する固有ベクトルとする。このとき  $\mathbf{u}_1 \cdot \mathbf{u}_2 = 0$  である。

(証明).

$$\begin{aligned} \lambda_1(\mathbf{u}_1 \cdot \mathbf{u}_2) &= (\lambda_1 \mathbf{u}_1) \cdot \mathbf{u}_2 = {}^t(\lambda_1 \mathbf{u}_1) \mathbf{u}_2 = {}^t(A \mathbf{u}_1) \mathbf{u}_2 = {}^t \mathbf{u}_1 ({}^tA) \mathbf{u}_2 \\ &= {}^t \mathbf{u}_1 A \mathbf{u}_2 = {}^t \mathbf{u}_1 (\lambda_2 \mathbf{u}_2) = \mathbf{u}_1 \cdot (\lambda_2 \mathbf{u}_2) = \lambda_2 (\mathbf{u}_1 \cdot \mathbf{u}_2) \end{aligned}$$

より、 $(\lambda_1 - \lambda_2)(\mathbf{u}_1 \cdot \mathbf{u}_2) = 0$ 。ここで、 $\lambda_1 \neq \lambda_2$  であるから  $\mathbf{u}_1 \cdot \mathbf{u}_2 = 0$  が成り立つ。  $\square$

6.1 節の例 6.9 (p.152) のように、 $n$  次正方行列  $A$  のすべての成分が実数であっても、 $A$  の固有値は実数であるとは限らない。一般に  $n$  次正方行列  $A$  の固有方程式は、複素数の範囲では必ず解をもつ。また  $\lambda$  を  $A$  の固有方程式の複素数解とすると、連立 1 次方程式  $(\lambda I - A)\mathbf{x} = \mathbf{0}$  は非自明な複素数解をもつ。つまり、零ベクトルでない  $n$  項複素数ベクトル  $\mathbf{u}$  で、 $A\mathbf{u} = \lambda\mathbf{u}$  を満たすものが存在する。従って、 $n$  次正方行列  $A$  は複素数の範囲では必ず固有値と固有ベクトルをもつ。

次の定理により、 $A$  が実対称行列の場合には、その固有値は必ず実数となり、実数ベクトルの範囲で固有ベクトルが存在することがわかる。

**定理 3.**  $A$  が実対称行列ならば、 $A$  の固有値はすべて実数である。

(証明).  $\lambda$  を  $A$  の固有値とし、 $\mathbf{u} = \begin{pmatrix} u_1 \\ \vdots \\ u_n \end{pmatrix}$  をその固有ベクトルとする。 $\mathbf{u}$  の複素共役を

$\bar{\mathbf{u}} = \begin{pmatrix} \bar{u}_1 \\ \vdots \\ \bar{u}_n \end{pmatrix}$  とするとき、 $A\mathbf{u} = \lambda\mathbf{u}$  の両辺の複素共役をとると、 $A$  の各成分が実数であるから  $A\bar{\mathbf{u}} = \bar{\lambda}\bar{\mathbf{u}}$  が成り立つ。このとき

$$\begin{aligned} \lambda(\mathbf{u} \cdot \bar{\mathbf{u}}) &= (\lambda \mathbf{u}) \cdot \bar{\mathbf{u}} = {}^t(\lambda \mathbf{u}) \bar{\mathbf{u}} = {}^t(A \mathbf{u}) \bar{\mathbf{u}} = {}^t \mathbf{u} ({}^tA) \bar{\mathbf{u}} \\ &= {}^t \mathbf{u} A \bar{\mathbf{u}} = {}^t \mathbf{u} (\bar{\lambda} \bar{\mathbf{u}}) = \mathbf{u} \cdot (\bar{\lambda} \bar{\mathbf{u}}) = \bar{\lambda} (\mathbf{u} \cdot \bar{\mathbf{u}}) \end{aligned}$$

より、 $(\lambda - \bar{\lambda})(\mathbf{u} \cdot \bar{\mathbf{u}}) = 0$  となる。 $\mathbf{u} \neq \mathbf{0}$  より、 $\mathbf{u} \cdot \bar{\mathbf{u}} = |u_1|^2 + \dots + |u_n|^2 \neq 0$  であるから、 $\lambda = \bar{\lambda}$  が成り立つので、 $\lambda$  は実数である。  $\square$

**注意 4.** 定理 3 より、実対称行列  $A$  の固有値  $\lambda$  は実数であり、固有ベクトルは実数係数の同次連立 1 次方程式の非自明な解となる。従って固有値  $\lambda$  に関する固有ベクトルとして実数ベクトルがとれる。

この節では、実数だけでなく複素数も扱うため、すべての成分が実数である場合には、実対称行列という用語を用いる。

$\lambda$  は複素数で、 $\mathbf{u}$  は複素数ベクトルと考えているが、実際には  $\lambda$  が実数の範囲に含まれていることを示す。

$x, y$  を実数とするとき、複素数  $u = x + yi$  の複素共役とは  $\bar{u} = x - yi$  のことである。

複素数  $u$  に対し、 $u\bar{u} = |u|^2 \geq 0$  であり、等号成立は  $u = 0$  のときに限ることに注意する。

定理 5. 実対称行列  $A$  は対角化可能である.

(証明).  $A$  を  $n$  次実対称行列とする.  $n$  に関する数学的帰納法で証明する.  $n = 1$  のとき,  $A$  は対角行列なので, 定理の主張は正しい.  $n \geq 2$  とし, 任意の  $(n-1)$  次実対称行列が対角化可能であると仮定する.  $\mathbf{u}_1 \in \mathbb{R}^n$  を  $A$  の固有値  $\lambda_1$  に関する固有ベクトルで  $|\mathbf{u}_1| = 1$  を満たすものとする.  $\mathbb{R}^n$  の部分集合を

$$W = \{\mathbf{u} \in \mathbb{R}^n \mid \mathbf{u} \cdot \mathbf{u}_1 = 0\}$$

とすると,  $W$  は  $\mathbb{R}^n$  の  $(n-1)$  次元部分空間となる. (Web「正規直交基底」の公式 (1.2) を参照.)  $\mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{u}_n$  を  $W$  の正規直交基底とすると,  $2 \leq i \leq n$  について,  $W$  は  $\text{Span}\{\mathbf{u}_1\}$  の直交補空間である.

$$(A\mathbf{u}_i) \cdot \mathbf{u}_1 = {}^t(A\mathbf{u}_i)\mathbf{u}_1 = {}^t\mathbf{u}_i({}^tA)\mathbf{u}_1 = {}^t\mathbf{u}_i A\mathbf{u}_1 = {}^t\mathbf{u}_i(\lambda_1\mathbf{u}_1) = \lambda_1\mathbf{u}_i \cdot \mathbf{u}_1 = 0$$

より,  $A\mathbf{u}_i \in W$  である. 従って,  $A\mathbf{u}_i$  は  $\mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{u}_n$  の 1 次結合

$$A\mathbf{u}_i = b_{2,i}\mathbf{u}_2 + \dots + b_{n,i}\mathbf{u}_n = \begin{pmatrix} \mathbf{u}_2 & \dots & \mathbf{u}_n \end{pmatrix} \begin{pmatrix} b_{2,i} \\ \vdots \\ b_{n,i} \end{pmatrix}$$

と表される. このとき,

$$A \begin{pmatrix} \mathbf{u}_2 & \dots & \mathbf{u}_n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \mathbf{u}_2 & \dots & \mathbf{u}_n \end{pmatrix} \begin{pmatrix} b_{2,2} & \dots & b_{2,n} \\ \dots & \dots & \dots \\ b_{n,2} & \dots & b_{n,n} \end{pmatrix}$$

であるから,  $R = \begin{pmatrix} \mathbf{u}_2 & \dots & \mathbf{u}_n \end{pmatrix}$ ,  $B = \begin{pmatrix} b_{2,2} & \dots & b_{2,n} \\ \dots & \dots & \dots \\ b_{n,2} & \dots & b_{n,n} \end{pmatrix}$  とおけば,  $AR = RB$  が成り立つ. また,  $\mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{u}_n$  が  $W$  の正規直交基底であることから,  ${}^tRR = I_{n-1}$  となる. 従って,

$${}^tB = {}^tB{}^tRR = {}^tR{}^tAR = {}^tRAR = {}^tRRB = B$$

より,  $B$  は  $(n-1)$  次実対称行列である. 帰納法の仮定より,  $(n-1)$  次正則行列  $Q$  で  $Q^{-1}BQ$  が対角行列になるものが存在する. ここで,

$$P = \begin{pmatrix} \mathbf{u}_1 & RQ \end{pmatrix}$$

とおくと,  ${}^tR\mathbf{u}_1 = \mathbf{0}$  より,

$$\begin{pmatrix} {}^t\mathbf{u}_1 \\ Q^{-1}{}^tR \end{pmatrix} P = \begin{pmatrix} {}^t\mathbf{u}_1\mathbf{u}_1 & {}^t\mathbf{u}_1RQ \\ Q^{-1}{}^tR\mathbf{u}_1 & Q^{-1}{}^tRRQ \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & {}^t\mathbf{0} \\ \mathbf{0} & I_{n-1} \end{pmatrix} = I_n$$

であるから,

$$P^{-1} = \begin{pmatrix} {}^t\mathbf{u}_1 \\ Q^{-1}{}^tR \end{pmatrix}$$

$AR = RB$  であるから,  ${}^tR{}^tA = {}^tB{}^tR$  となることに注意する.

この  $\mathbf{0}$  は  $(n-1)$  項の零ベクトルを表す.

${}^tR\mathbf{u}_1 = \mathbf{0}$  であるから,  ${}^t\mathbf{u}_1R = {}^t\mathbf{0}$  となる.

である。このとき、

$$\begin{aligned}
 P^{-1}AP &= \begin{pmatrix} {}^t\mathbf{u}_1 \\ Q^{-1}{}^tR \end{pmatrix} A \begin{pmatrix} \mathbf{u}_1 & RQ \end{pmatrix} \\
 &= \begin{pmatrix} 1 & {}^t\mathbf{0} \\ \mathbf{0} & Q^{-1} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} {}^t\mathbf{u}_1 \\ {}^tR \end{pmatrix} A \begin{pmatrix} \mathbf{u}_1 & R \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & {}^t\mathbf{0} \\ \mathbf{0} & Q \end{pmatrix} \\
 &= \begin{pmatrix} 1 & {}^t\mathbf{0} \\ \mathbf{0} & Q^{-1} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} {}^t\mathbf{u}_1 \\ {}^tR \end{pmatrix} \begin{pmatrix} A\mathbf{u}_1 & AR \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & {}^t\mathbf{0} \\ \mathbf{0} & Q \end{pmatrix} \\
 &= \begin{pmatrix} 1 & {}^t\mathbf{0} \\ \mathbf{0} & Q^{-1} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} {}^t\mathbf{u}_1 \\ {}^tR \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \lambda_1\mathbf{u}_1 & RB \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & {}^t\mathbf{0} \\ \mathbf{0} & Q \end{pmatrix} \\
 &= \begin{pmatrix} 1 & {}^t\mathbf{0} \\ \mathbf{0} & Q^{-1} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \lambda_1 & {}^t\mathbf{0} \\ \mathbf{0} & B \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & {}^t\mathbf{0} \\ \mathbf{0} & Q \end{pmatrix} \\
 &= \begin{pmatrix} \lambda_1 & {}^t\mathbf{0} \\ \mathbf{0} & Q^{-1}BQ \end{pmatrix}
 \end{aligned}$$

は対角行列になるので、 $A$  は対角化可能である。 □

**定理 6.** 実対称行列は直交行列により、対角化可能である。つまり、実対称行列  $A$  に対し、直交行列  $P$  で  $P^{-1}AP$  が対角行列になるものが存在する。

(証明).  $n$  次実対称行列  $A$  の固有値全体の集合を  $\{\lambda_1, \dots, \lambda_m\}$  とし、固有空間  $W(\lambda_i, A)$  の次元を  $d_i$  とするとき、定理 5 より  $A$  は対角化可能なので、6.4 節の定理 6.42 (p.164) より、 $d_1 + \dots + d_m = n$  が成り立つ。 $\mathbf{u}_{i,1}, \dots, \mathbf{u}_{i,d_i}$  を  $W(\lambda_i, A)$  の正規直交基底とすれば、定理 2 より、

$$\mathbf{u}_{1,1}, \dots, \mathbf{u}_{1,d_1}, \dots, \mathbf{u}_{m,1}, \dots, \mathbf{u}_{m,d_m}$$

は  $\mathbb{R}^n$  の正規直交基底になる。従って、

$$P = \begin{pmatrix} \mathbf{u}_{1,1} & \cdots & \mathbf{u}_{1,d_1} & \cdots & \mathbf{u}_{m,1} & \cdots & \mathbf{u}_{m,d_m} \end{pmatrix}$$

は直交行列となり、6.3 節の定理 6.31 (p.160) より、 $P^{-1}AP$  は対角行列になる。 □

**例題 7.**  $A = \begin{pmatrix} 2 & 1 \\ 1 & 2 \end{pmatrix}$  を直交行列により対角化せよ。

(解答).  $A$  の固有値は 1 と 3 であり、固有値 1 の固有ベクトルとして  $\mathbf{u}_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \end{pmatrix}$ 、固有値 3 の固有ベクトルとして  $\mathbf{u}_2 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix}$  がとれる。よって、 $\frac{\mathbf{u}_1}{|\mathbf{u}_1|} = \begin{pmatrix} \frac{1}{\sqrt{2}} \\ -\frac{1}{\sqrt{2}} \end{pmatrix}$  は固有空間  $W(1, A)$  の正規直交基底であり、 $\frac{\mathbf{u}_2}{|\mathbf{u}_2|} = \begin{pmatrix} \frac{1}{\sqrt{2}} \\ \frac{1}{\sqrt{2}} \end{pmatrix}$  は固有空間  $W(3, A)$  の正規直交基底である。従って、 $P = \begin{pmatrix} \frac{1}{\sqrt{2}} & \frac{1}{\sqrt{2}} \\ -\frac{1}{\sqrt{2}} & \frac{1}{\sqrt{2}} \end{pmatrix}$  とおけば、 $P$  は直交行列であり、 $P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 3 \end{pmatrix}$  が成り立つ。 □

Web「正規直交基底」の問 11 を参照。

**注意 8.** 一般に  $n$  次実対称行列  $A$  が  $n$  個の相異なる固有値  $\lambda_1, \dots, \lambda_n$  をもつ場合には, 固有値  $\lambda_j$  の固有ベクトル  $\mathbf{u}_j$  として, 長さ  $|\mathbf{u}_j| = 1$  であるものを取り,  $P = \begin{pmatrix} \mathbf{u}_1 & \dots & \mathbf{u}_n \end{pmatrix}$  とおけば, 定理 2 より  $P$  は直交行列となり,  $A$  は  $P$  により対角化することができる. 固有多項式が重解をもつ場合には, 次の例題のようにシュミットの直交化法 (Web「正規直交基底」の命題 5) を用いればよい.

**例題 9.**  $A = \begin{pmatrix} 0 & 1 & 2 \\ 1 & 0 & 2 \\ 2 & 2 & 3 \end{pmatrix}$  を直交行列により対角化せよ.

(解答).  $A$  の固有多項式は,  $F_A(t) = (t+1)^2(t-5)$  であるから,  $A$  の固有値は  $-1$  と  $5$  である. 固有値  $-1$  に関する固有空間は,  $\mathbf{a}_1 = \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$ ,  $\mathbf{a}_2 = \begin{pmatrix} -2 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$  とおくと  $W(-1, A) = \text{Span}\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2\}$  である. ここで, シュミットの直交化法により,

$$\mathbf{b}_1 = \frac{\mathbf{a}_1}{|\mathbf{a}_1|} = \begin{pmatrix} -\frac{1}{\sqrt{2}} \\ \frac{1}{\sqrt{2}} \\ 0 \end{pmatrix}$$

$$\mathbf{b}'_2 = \mathbf{a}_2 - (\mathbf{a}_2 \cdot \mathbf{b}_1)\mathbf{b}_1 = \begin{pmatrix} -1 \\ -1 \\ 1 \end{pmatrix}, \quad \mathbf{b}_2 = \frac{\mathbf{b}'_2}{|\mathbf{b}'_2|} = \begin{pmatrix} -\frac{1}{\sqrt{3}} \\ -\frac{1}{\sqrt{3}} \\ \frac{1}{\sqrt{3}} \end{pmatrix}$$

とおくと,  $\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2$  は  $W(-1, A)$  の正規直交基底になる. また固有値  $5$  に関する固有空間は

$\begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 2 \end{pmatrix}$  で生成されるので, 長さ  $1$  の固有ベクトルとして  $\begin{pmatrix} \frac{1}{\sqrt{6}} \\ \frac{1}{\sqrt{6}} \\ \frac{2}{\sqrt{6}} \end{pmatrix}$  がとれる. 以上より,

$P = \begin{pmatrix} -\frac{1}{\sqrt{2}} & -\frac{1}{\sqrt{3}} & \frac{1}{\sqrt{6}} \\ \frac{1}{\sqrt{2}} & -\frac{1}{\sqrt{3}} & \frac{1}{\sqrt{6}} \\ 0 & \frac{1}{\sqrt{3}} & \frac{2}{\sqrt{6}} \end{pmatrix}$  とおけば,  $P$  は直交行列であり,  $P^{-1}AP = \begin{pmatrix} -1 & 0 & 0 \\ 0 & -1 & 0 \\ 0 & 0 & 5 \end{pmatrix}$  が成り立つ. □

**問 10.** 次の対称行列  $A$  を直交行列により対角化せよ.

(1)  $A = \begin{pmatrix} 0 & 2 \\ 2 & 3 \end{pmatrix}$

(2)  $A = \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 \\ 1 & 1 & -1 \\ 1 & -1 & 1 \end{pmatrix}$

(3)  $A = \begin{pmatrix} 2 & 1 & 0 \\ 1 & 1 & 1 \\ 0 & 1 & 2 \end{pmatrix}$

• 問の略解

問 10 (p.4) (1)  $P = \begin{pmatrix} -\frac{2}{\sqrt{5}} & \frac{1}{\sqrt{5}} \\ \frac{1}{\sqrt{5}} & \frac{2}{\sqrt{5}} \end{pmatrix}$  とすると,  $P$  は直交行列で,  $P^{-1}AP = \begin{pmatrix} -1 & 0 \\ 0 & 4 \end{pmatrix}$ .

(2)  $P = \begin{pmatrix} -\frac{1}{\sqrt{3}} & \frac{1}{\sqrt{2}} & \frac{1}{\sqrt{6}} \\ \frac{1}{\sqrt{3}} & \frac{1}{\sqrt{2}} & -\frac{1}{\sqrt{6}} \\ \frac{1}{\sqrt{3}} & 0 & \frac{2}{\sqrt{6}} \end{pmatrix}$  とすると,  $P$  は直交行列で,  $P^{-1}AP = \begin{pmatrix} -1 & 0 & 0 \\ 0 & 2 & 0 \\ 0 & 0 & 2 \end{pmatrix}$ .

(3)  $P = \begin{pmatrix} \frac{1}{\sqrt{6}} & -\frac{1}{\sqrt{2}} & \frac{1}{\sqrt{3}} \\ -\frac{2}{\sqrt{6}} & 0 & \frac{1}{\sqrt{3}} \\ \frac{1}{\sqrt{6}} & \frac{1}{\sqrt{2}} & \frac{1}{\sqrt{3}} \end{pmatrix}$  とすると,  $P$  は直交行列で,  $P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 0 & 0 & 0 \\ 0 & 2 & 0 \\ 0 & 0 & 3 \end{pmatrix}$ .